



小田小だより

平成28年11月号

〒236-0052 横浜市金沢区富岡西1丁目69番1号 TEL 045(775)3011

<http://www-local.edu.city.yokohama.jp/sch/es/koda/>

横浜市立小田小学校

「本は旅である」

～深まりゆく秋に思いを寄せて～

学校長 木村 昭雄



本は「もの」や「品物」ではない。本は、ある時代のだれかが自分の生命を注いで残した何かであり、生命が移された何かである。
（「読売新聞」2016. 3. 26 真島一郎）

この言葉は、真島氏がある市民講座で、文化人類学者山口昌夫（1931～2013）について語った話の中に出てきます。氏が敬愛してやまない山口と本との関係を語ったものです。

そもそも本とは何か？ちなみにユネスコでは「本文が少なくとも49ページ以上からなる、印刷された不定期刊行物」と基準を定めています。

しかし、当然のことながら、この条件を満たしている冊子が全て本であるとは限りません。私は、著者の磨かれた生命はもちろんのこと、先人たちの生命が刻まれたものこそが本であると思っています。山口はことのほか本を愛し、自らもたくさんの本を執筆しますが、いわゆる書齋派ではなく、かなりスケールの大きい行動派であると思われます。東京大学を卒業すると、数年後にはナイジェリアの大学講師として赴任し、世界中を巡ります。真島氏によればそれは、「日本の天皇制を深い体験で捉えるためのモデルを得る」ためであったと言い、それが『天皇制の文化人類学』なる本に結実していると言います。

何年か前、この本を読んだことがあります。確かにこの本には、山口の生命が宿っていると思えました。そしてその生命には自分が読んで得た生命と、世界中で触れた生命が注がれたに違いないと思ったものです。

「本は旅である」とは山口の言葉ですが、現在と過去を旅して触れた生命を自分の生命として結晶させたものが本ということなのでしょう。上述した真島氏の言葉の通り、本は「もの」や「品物」などではなく、生命体であろうと考えます。それを読まない手はない。人の生命の助けをいただくことでもあるのですから……。自分だけでは生命は弱まってしまう！……。私が本を読む理由の一つです。

小学校時代、私は伝記が大好きでした。私が過ごした小学校には図書室という部屋がなく、音楽室の前の廊下に書架がずらりと並び、絵本や図鑑、童話などの本がぎっしり入っていました。その中から何気なく手にしたのが「エジソン」の伝記でした。小学校4年生の夏休み前日のことでした。それを読んだときの感動と衝撃は今も忘れることができません。自分の勉強部屋にイースト菌が入っていた試験管のような形をした入れ物や、薬の空瓶に色水や食塩水、砂糖水を入れて机の上に並べていました。本の挿絵にあったエジソンの実験室を再現しようとしたのです。その本を読んで以来、理科の実験が大好きになりました。次に手にしたのがキューリー夫人。その後もベートーベン、野口英夫、福沢諭吉・・・と次から次へと読んでいきました。伝記は、大人になった今でもよく手にします。

子ども時代は身も心も大きく成長する時です。そのための大切な栄養素のひとつが、読書です。多くの本との出会いは、子どもたちの世界を拡張します。言葉にならないたくさんの思いを代弁してくれます。

「本と旅する 本を旅する」3年前の読書週間の標語です。10月27日から第70回読書週間が始まりました。本年度の標語は「いざ、読書。」本を手にしてページをめくるときのわくわくした気持ちは子どもも大人も変わりません。この秋、どうかたくさんのすてきな本との出会いがありますように……。ページをめくって、いつでもどこでも自由にめぐることのできる本の世界を旅するすてきな秋となりますように……。